

終助詞の音調について

—— 落語資料を中心に ——

服 部 匡

0 前置き－上昇しないネについて－

筆者は服部（1999）において、「(拍の初めまたは途中で自然下降に逆らって)上昇しないネ」の存在を指摘した。また、服部（2001、前稿と呼ぶ）において、市販の落語資料におけるネの音調を記述し、「上昇しないネ」がよく出現することを指摘した。

その後出た『文法と音声Ⅲ』（音声文法研究会編 くろしお出版 2001）所収の、杉藤美代子、犬飼隆、森山卓郎各氏の論文においても「上昇しないネ」の存在は認められており、もはやその存在については異論のないものと思われる。¹⁾

ただ、だれもが聞いて確かめられる発話資料での事例は、今のところ、筆者が前稿で示した落語のもの以外に指摘されていない。

そのため、「上昇しないネ」の、共通語における事例を、ここにいくつかあげておく。市販のDVD,CD-ROMから採集したものである。(1)–(3)はテレビ番組(ドラマ等)、(4)は映画、(5),(6)は対談である。²⁾それぞれの話者の言語的バックグラウンドは必ずしも明らかではないが、共通語の音調をとった発話である。いずれも前要素に低く付き、文末の音調は下向きである。まだ限られた量の資料しか調査していないが、こうしたネは、さほど苦勞せずに見出すことができた。

(1) 刑事：おい、真山、出て来い、こら。(ドアを激しく叩くが反応がない)

女性刑事：いませんね。

イ「マセ」ンネ

(ケイゾク 3 史上最悪の爆弾魔 KIBF-5003 3-7-14:35 発話者：中谷美紀)

(2) 柴田：あ、トカゲ男さんですね。

嶋村：何が。

柴田：噂通りのセクハラ大魔王ですね。

セ「クハラダイマ」オーデスネ

(ケイゾク4 さらば!愛しき殺人鬼 KIBF-5004 1-21-60.27 発話者: 中谷美紀)

- (3) (空に月のようなものが二つあるのを見て)

月が二つありますね。

アリマ]スネ

(笑う犬の冒険 スーパーベスト Vol.1 さよなら小須田部長 PCBC 50183 1-12-36.26 発話者: 内村光良)

- (4) 竜造：そうやってすかしているところを見ると、とてもお転婆のさっちゃんと思えないね。

オ「モエ」ナイネ

(男はつらいよ 寅次郎夢枕 DKS-010 1-2-8 : 45 発話者: 松村達夫)

- (5) 安西：昼ごはんは、自分で作ったりする。

村上：けっこう時間かかりそうですね。

ジ「カンカカリソーデ」スネ

(『CD-ROM 村上朝日堂 夢のサーフシティー』付録「南青山愛人カレー」対談 3:27 発話者: 村上春樹)

- (6) 村上：僕が飲んで帰って、それから水丸さんが飲んで帰って、それから稲越さんが来るっていう感じ。

安西：そんな感じだね。

村上：なんか、あれですね。時差出勤みたいですね。

ア「レデ」スネ ジ「サシュ」ッキンミ]タイデスネ

(同上 7:49)

なお、中央式アクセント体系の方言（近畿等）においても、このようなネが聞かれることがある。実生活およびテレビ番組等において発話例を確認しているが、今のところ市販音源中の例を見出していないので、今回は省略する。

1 終助詞ネとナ音調

筆者は前稿（服部（2001））で、明治20年代から30年代の生まれの東京話者の演じる落語を資料として、終助詞ネの音調の種類についての観察を行った。本稿はその続編である。前稿は次のような点で不備なものであった。

第一に、短いネのみを問題にして、ネーと長くなる場合を考慮していない。長い場合も含めた総合的な記述が必要である。

第二に、主文述語についたネのみを問題にしており、述語以外の句についたネ（間投的用法のもの）を考慮していない。ネの特性を真に明らかにするには、間投的用法も含めた総合的観点が必要である。

第三に、ネとナの音調の比較対照を行っていない。

ネ（-）とナ（-）（および、方言等で用いられるノ（-））は、構文的性質（承接関係等）がほぼ同じであり、機能上も一種の共通点があることは明らかであるが、もちろん相違点もある。音調面からもそれらの特性の比較を行うことは必要である。³⁾

こうしたことを踏まえ、ここでは、ネ（-）とナ（-）に関して、述語以外の句につく場合も含めてその音調的特性の共通点・相違（あるとすれば）を解明するため、東京語の録音実例における、両者の主な音調を記述することを目指す。

ただし、ネについてもナについても、無核の要素について音調上のまとまりを作る場合については、（前稿でも触れたように）なお筆者には不明な点があるので今回は扱わず、有核の要素についた場合のみを問題にする。また、いわゆる平叙文以外の文末（述語以降に後置要素がある場合も含めて）についたネおよび、ダの省略により体言的要素に直接付いたネは、今回も考慮しない。

落語は純粹の自然発話ではないが終助詞のような要素の研究資料としては好適なように思われる。本稿で資料とするのは、五代目古今亭志ん生の演じた落語のうち、市販のCD・DVDに収められているものである。志ん生の口演は大量にCD・DVDで入手可能であり、計量的研究の素材として用いることも可能である。またその一部は（部分的に不対応の箇所もあるが）『五代目志ん生全集』（弘文出版）に、当該録音をかなり正確に文字化したものが載せられており、実際に聞くことを前提として大まかな検索を行うのに便利である。

音声の実例を資料とするにあたっては、言い誤りや混乱のような言語運用上の要因、個人的傾向や話の内容から来る偏り等に十分配慮しなければならない。計

量的観点からの調査は準備中である。

2 落語における終助詞ネとナの音調

2.1 主な音調の種類と概観

ここでは、終助詞ネやナの機能的な側面には深入りせず、可能な音調の種類のみを問題にする。結論を先に言えば、ネもナも、概ね平行した音調の種類を許すように思われる。また、それは、主文述語につく場合も、述語以外の句につく場合もおよそ同じである。

音調の概略を、以下の記号により表記する。当該拍の頭から高くなることを「○」、当該拍の次から低くなることを「○」、当該拍の中で上昇することを『○と表す。特に大幅に（その判断は徹底していないが）上昇・下降する場合は「[、]」などと表す。-は、任意の数の拍を表わす

以下に主な音調の種類を示しておく（音調のタイプとしてどれだけのものを設定すべきか-そもそも音調の種類を離散的なもの考えるべきかどうか-は難しい問題であるが、仮に次の種類を認める）。ネが主文述語としての「無い」につく場合を例としてあげる。

(7)

1a -]-ネ 低く付く 例： ナ]イネ

1b -]-ネ]- 低く付き、更に下降する 例： ナ]イネ]-

2a -]-「ネ 高く付く 例： ナ]イ「ネ

2b -]-「ネ- 高く付き、長く維持される 例： ナ]イ「ネ-

2c -]-『ネ ~ -]-ネ「- 低く付き上昇する

例： ナ]イ『ネ ~ ナ]イネ「-)

3 -]-「ネ]- 高く付き、下降する 例： ナ]イ「ネ]-

これらの音調のうち、2c（終助詞の拍中で、または、2拍に延びてその間で上昇するもの）の例は少なく、2b（高く維持されるもの）もそれほど多くない。

1aと1b（例えば、ナ]イネとナ]イネ]-）は、聴覚上区別の困難な場合がある。また、1bでの下降がめだたなくなり、ナ]イネ-のようになることもある。

また、2aと2bの区別（長さ）、2aと2cの区別（拍の頭での上がり方の急速さ）

も不明瞭なことがある。

2a は、ネの音調の向きにより、3 に近づくことがある。

更に、3 のネの拍の頭での上がり方が小さいと、1b との区別が困難になる。

このようなことがあるが、以下ではそれぞれのタイプの音調について、典型的な例をあげることにする。訛音の表記は、正確でないことがある。

2.2 主な音調の実例

2.2.1 主文述語につく場合

2.2.1.1 ネの場合

短い場合 (1a,2a) については、既に前稿で扱ったが、改めて別の例をあげておく。

<1a> -]--ネ

- (8) 半七：お花さんしょうがねえね、こりゃあ。

「ショーガネ】ーネ

(宮戸川 VZCG-199-2-22:37)

- (9) 演者：二畳ぐらいな座敷だ、え？、箱ですね、まるで

ハ「コデ】スネ

(お直し OCD-43008-1-10:16)

- (10) 幫間：痛いね、あなた、[針が] 横だつての縦に

イ「タ】イネ

(幫間腹 COCJ-31287-2--16:46)

<1b> -]--ネ]-

- (11) 清公：何？今なんか言つてたねえ。

ナ】ンカイ「ツテ】タネ】-

(三枚起請 FDLA4017-2-8:58)

- (13) 女房：あそこに印半纏着て、ずいぶん酔つてんねえ

ヨ】ッテンネ-

(お直し OCD-43008-1-33:45)

<2a> -] - 「ネ

- (14) 幫間：あなたがお打ちになんの？へええ、えらいね。

エ「ラ]イ「ネ

(幫間腹 COCJ-31287-2-13:12)

- (15) 若い衆：何だいありゃ、弱ったね、どうも

ヨ「ワ]ッタ「ネ

(五人廻し OCD-43007-1-17:40)

- (16) 金兵衛：大丈夫だね？

ダ「イジヨ]ブダ「ネ

長屋の男:ええ、よろしゅうござんす。

(黄金餅 OCD-43007-2-12:42)

<2b> -] - 「ネ -

- (17) 客：やだね、ええ？ [略] この廻し部屋と来た日にゃ汚ねえねえ

ヤダ「ネ — キ「タネ]-「ネ-

(五人廻し OCD-43007-1-8:14)

- (18) 主人：ねえ、花魁、お前も随分おれのとこに長くいるねえ。

ナ]ガクイル「ネ-

(お直し OCD-43008-1-18:47)

<2c> -] - 『ネ ～ -] - ネ「-

好例なし

<3> -] - 「ネ]-

- (19) 幫間：あなたうまいねえ、そういうことをしているところを見ると

ウ「[マ]イ「ネ]-

(幫間腹 COCJ-31287-2-16:14)

- (20) お駒：もう本当にすみませんねえ、丈八つあーん

スイマセン「[ネ]-

(駒長 PCCG-00279-3-15:38)

- (21) 女将：へええ、憎いねえ

ニ「ク」イ「ネ」ー

(三枚起請 FDLA4017-1-1-18:06)

2. 2. 1. 2 ナの場合

<1a> -]ーナ

- (22) 半七：このごろの女あ図々しいな

「ズーズーシー」ナ

(宮戸川 VZCG - 199-2-8.26)

- (23) 万屋源兵衛：お前さつき、あたしが柳田様と碁を囲んでる時に、何か言っ
てたな

「ナ」ンカイッ「テ」タナ

(柳田格之進 VZCG-193-1-15.25)

- (24) 旦那：お前さん急所を知ってんだな

「キューショオシッテ」ンダナ

(麻のれん PCCG-00313-3-01:39)

<1b> -]ーナ]ー

- (25) 徳兵衛：おかしいですなあ。

オ「カシ」ーデスナ]ー

(柳田格之進 VZCG-193-1-16.02)

- (27) 半七の叔父：お前と俺と若え自分にも、こんなことあったなあ。

「コンナコ」ト「ア」ッタナー

(宮戸川 VZCG-199-2-18.55)

<2a> -]ー「ナ

- (28) 若い衆：ああそうですか、へいへい、お独りさんですな

オヒ「ト」リサンデス「ナ

(五人廻し OCD-43007-1-11:19)

- (29) 兄さん：「じかに冠をかぶらず」というのは、こりゃあ大変なもんだな

タ「イヘンナモ」ンダ「ナ
 (風呂敷 OCD-43001-2-11.54)

<2b> -]-「ナ-

(30) 客：嫌んなちやうなあ、本当になあ

イ「ヤ」ンナツチャウ「ナ-

(五人廻し OCD-43007-1-8.48)

(31) 演者：あすこへ行ってそんなことを思い出すようじゃあ、もう駄目なんで
すなあ

モ]-ダ「メ」ナンデス「ナ-

(五人廻し OCD-43007-1-8.09)

(32) 金兵衛：もったいねえことしやがんなあ。

シ「ヤ」ガン「ナ-

(黄金餅 PCBP-50202 1-1-5.46)

<2c> -]-「ナ ~ -]-ナ「
 好例なし

<3> -]-「ナ」-

(33) 若旦那：嬉しいなあ。

ウ「レシ」-「ナ」-

(幫間腹 COCJ-31287-2-11:50)

(34) 演者：へんくつとこのぐず安とは、大変気があってね仲がいいんでござい
 ますから不思議なものでございますなあ。

フ「シギナモ」ンデゴザイマス「ナ」-

(安兵衛狐 PCCG-293-3 - 04:51)

2. 2. 1. 3 補足：発話の姿勢との関連

興味深いことに、主として「枕」部分で、話者自身の言葉で客に語りかける場
 合には、多くの場合、2a（高く付く）が用いられている。この場合は、文末は通

常ゴザイマスまたはデス・マス体である。ネとナのいずれを用いる場合もあり、一続きの発話の中で両者混用することもある。

前稿で述べたように、独り言の部分でもネとナのいずれも用いられることがあり、その場合の音調にもさまざまなものがある。

2.2.2 述語以外の句につく場合

2.2.2.1 ネの場合

<1a> -]--ネ

(35) 棟梁：まあね、考えてごらん。

マ]ーネ

(三枚起請 FDLA4017-2-15:33)

(36) 八公：[五年帰らなかったことがあると言った後] その次にね、十年帰らなかった。

ソ「ノツギ」ニネ

(菟菟問答 PCBP-50202-1-4-11:30)

(37) 演者：蒲団なんてものは、[高さを示し] こんなですからね、蒲団から落っこって目えまわしたやつがある。

「コンナデ」スカラネ

(お直し OCD-43008-1-9:17)

<1b> -]--ネ]ー

(38) 次郎衛：(略) 一杯でしょうけどもねえ、乗せておくんない

イ「ツパイデシヨ」ーケドモネー

(佃祭 PCCG-00281-3-6:19)

(40) 演者：もう蚤だってねえ、もう腹がぺこぺこだ。

ノ「ミ」ダッテネー

(お直し OCD-43008-1-11:08)

<2a> -]--「ネ

(41) 演者：竿のとっ先へトンボがとまってたりね、浮きの周りにあめんぼがい

たり [略]

トマッテ]タリ「ネ

(雪とん TECR-20013-1-07:32)

- (42) 旦那：ああ空市つあんがね、ああ、今夜泊まるってえからね
 モ「ク」イツァンガ「[ネ - ト「マルッテ」-カラ「ネ
 (麻のれん OCCG-00313-3-02:26)

<2b> --] - 「ネ -

- (43) 空市：それにまあ、旦那の前でございますがねえ [略]
 ダ「ンナノマ」イデゴ「ザイマ」スガ「ネー
 (麻のれん OCCG-00313-3-04:00)
- (44) 金兵衛：棒でけつから突ついてやろうか。ところんだと出るんだけどねえ。
え。しょうがねえなあ。
 ト「コロテンダトデ」ルンダケド「ネー
 (黄金餅 OCD-43007-2-8:30)
- (45) 金兵衛：どうしたってねえ、なんでも具合が悪いってえから、ちよいと俺
 あ見舞いに言ってみてやったら [略]
 ド] - シタッテ「ネー
 (黄金餅 OCD-43007-2-9:09)

<2c> --] - 「ネ ~ -] - ネ「-

- (46) 船頭：[隣の誂えた蕎麦を] で食っちゃってねえ 少し経つと隣のうちで、
 まだ「蕎麦屋さん来ないんだあ」
 ク] ッチャッテネ「-
 (お初徳平衛 FDLA4005-2-7:50)

<3> --] - 「ネ] -

- (47) 旦那：[(42)の続き] あの離れの八畳をねえ、あすこへ蒲団敷いてあげて
 おくれ。
 ハ] ナレノハ「チジョ」-オ「ネ」-

(麻のれん OCCG-00313-3-02:31)

- (48) 若旦那：実あねえ、親方

ジ「ツァ」ー「ネ」ー

(お初徳兵衛 FDLA4005-2-4:53)

2.2.2.2 ナの場合

<1a> -]--ナ

- (50) 蒟蒻屋：問答ってやつはな、向こうが何か言うところちで何か言う。

モ「ンド」ーッテ「ヤ」ツワナ

(蒟蒻問答 PCBP-50202-5-1-14:32)

- (51) 蒟蒻屋：裏の墓場から角塔婆持ってきてな、え？、俺が、もういけねえと

思ったら [略]

カク「ト」ーバモ「ッテキ」テナ

(蒟蒻問答 PCBP-50202-1-4-15:16)

<1b> -]--ナ]ー

好例なし

<2a> -]--「ナ

- (53) 若旦那：俺はな、少おし凝ったもんがあんでなあ、

オレワ「ナ

(幫間腹 COCJ-31287-2-12:44)

- (54) 和尚：こないだの嵐で倒れやがったからそおっと起こしてやつがかってあんだからな、あんまり叩くってえと門がそっちへ倒れるよ。

ヤ]ツガカッテア]ンダカラ「ナ

(黄金餅 OCD-43007-2-14:57)

- (55) 金兵衛：あすこを、俺あ飛び出してな、表店で商いでもしてえや。

ト「ビダ」シテ「ナ

(黄金餅 OCD-43007-2-20:58)

<2b> -]--「ナ-

(56) 男：また泳いでね、うん、そいで沈んじやってもいいやその方がなあ

ソ「ノホ」ーガ「ナ-

(替わり目 OCD-43006-2-2:03)

<2c> -]--「ナ ~ -]--ナ「-

好例なし

<3> -]--「ナ」-

(57) 亭主：夕べお前安のやつに会ったらなあ、おめえこんなことばかりしたっ

て [略、と] こういうわけでね [略]

「ア」ッたら「ナ」-

(お直し OCD-43008-3-27:15)

2.3 まとめ

ネとナについて、落語資料での実例を調査した結果、主文述語につく場合と文中の句につく場合とを通じて、両終助詞のとり主要な音調の種類は、(下がり目の後につく場合に関する限りでは) およそ同じであることがわかった。

3 補説：上昇調の特質について

川上泰氏は、「文末上昇調が強制されるケースは日本語（少なくとも東京語）には随分少ないのではないだろうか」と述べられている（2000:33）。このことについて、簡単に触れておきたい。

一見、上昇調が必須であるかのように思われる場合として、まず、文末がカで終わり、いわゆる疑問詞を含まない疑問文について述べる。木部暢子氏(1996:124)は、「か」で終わる疑問文は、共通語では、「上昇調の時にのみ質問文になる」とされるが、疑わしいように思われる。⁴⁾

事実と想定されるところを確認する質問（例：相手が作業を終えたように見える場合の「終わりましたか」）等では多く非上昇調が用いられる。しかし、単純に命題の真偽を問う場合でも、上昇しない音調が用いられることがある（必ずしも

詰問調というわけではない)。手許の録音資料(落語)から実例を2例あげておく。当該命題が成立するかしないかについて話者の見込みは中立的であるが、下向きの音調が用いられている(無論、こうした場面で上昇調を用いても差し支えない)⁵⁾。

(58) (保険への加入を希望する人に保険会社員が)

保険会社員：ちよいと失礼ですが伺いたいことがあるんですが

加入希望者：何ですか

保険会社員：あのう、ご両親はいらっしゃいますか↓

イ「ラッシャイマ」スカ

(CD-ROM『古今東西噺家紳士録』 二代目三遊亭圓歌 課長の犬 2388ES 3.56)

(59) (運転手の採用の面接で)

面接担当者：事故など起こしたことはありますか↓

ア「リマ」スカ

(柳亭痴楽 運転手募集 COCJ-31446)

さらに、従来殆ど注目されていない⁶⁾が、疑問詞を含まず、文末にカも伴わない文であっても、文末が上昇することなく質問として機能することがある。

例えば、「聞き手がディズニーランドに行ったことがある」という命題の真偽が不明で先行の話題とも関係ない場合に、

(60) あなた、ディズニーランドに行ったことある↓

と上昇しない(自然下降に従う)音調で質問することがある。実際、日常の会話において、質問を意図した発話が断定の発話のように受け取られる、あるいは、その逆の方向の誤解が生じることがままある。そうしたことが生じるのは、同様の音調で質問をも断定をも行える場合があるからだと思われる。⁷⁾

もちろん、文末を上昇させることにより、相手への配慮や働きかけといった気持ちが表わされることは広く認められることであり、(58)-(60)を上昇調で発話することにより、相手への働きかけ(回答促し等)や配慮の気持ちを表明することは可能である。

ネやナのような終助詞で終わる文でも、上昇調の場合には、終助詞自体の性質の上に、一般的な上昇調の性質に帰着できる(例えば相手への働きかけといった)機能が加わっているという見方ができるかもしれない。つまり、(音調に中立的に)

終助詞そのもの持つ性質・機能と、上昇調から生じる付加的な機能とを分けて考える方向が考えられる。

しかしながら、例えば、共通語でのワは上昇的な場合には使用が女性に限られるといった制約は、音調の特質から完全に予測できるものではなくこの終助詞特有の事情として記述しなければならない。こうした例もあることを考慮に入れると、例えばネやナにおける上昇調の性質をどのように捉えるべきかは、なお実例や内省を踏まえて慎重に検討する必要があるように思われる。

注

- 1) 上昇しないネに触れた文献を前稿でいくつかあげたが、早田(1999)と橋本(2000)を見落としていたので補っておく。
- 2) 今回は(ネの個所ではなく)引用部分の頭の個所の時刻を「トラック(タイトル-チャプター)番号-分秒」の形で示す。
- 3) 筆者は服部(1999)において、次のように指摘した(下線は今回つける)。ところで、あるいは、ネの実例は上昇調に偏っているかもしれない。しかしながら、その点について言えば、例えば終助詞ナもまた、その実例は上昇調に偏る可能性があるのであって、[後略]。
- 4) なお、木部氏のこの指摘は、「鹿児島方言では(同様の文が)上昇調でも下降調でも質問文になる」事実との対比によるものである。筆者は鹿児島方言を知らないため、共通語との相違についての判断はできない。同じ問題について木部・久見木(1993)には、次のようにある。

東京方言などでは通常、質問文は上昇調のイント.をとる。例えば「暑い↓」「暑いですか↓」「わかる↓」「わかりますか↓」は平叙文、「暑い↑」「暑いですか↑」「分かる↑」「わかりますか↑」は質問文である。

しかし、「暑い↓」「わかる↓」はともかく(本文で述べるようにこれらも質問になることがないとは言えないが)、「暑いですか↓」や「わかりますか↓」がなぜ平叙文と言えるのか理解しがたい。

なお、一般の話者にある音調を聞かせて自然度をたずねるという方法

での調査がしばしば行われる。その有効性を否定するものではないが、いくつかの問題があるように思われる。第一に、文脈・場面を言葉で（あるいは絵・漫画・動画等で）説明して発話を提示したとしても、話者が当該発話と結びつける状況（心的・外的）は様々でありうるし、どれだけの状況を想起することができるかも人によって異なる（「○○のようには言わない」と断言した話者が、実際の会話で正に○○と発話しているということ、幾度か経験した）。

文法研究の場合と同様、音調の研究にあっても、研究者自身の内省や話者への質問に基づく観察と、実際に基づく観察との両者が相補う形で研究が進展することが望まれる。

- 5) 共通語でのカの音調の実質についての詳しい分析は今できないので、カが下がり目の後にあって、低くつき、下向きの音調を取る場合のみを例としてあげておく。
- 6) 例外として、宮地裕氏（1979:250）は、「カエル↓」が、場面、文脈のたすけによっては「帰る？」をあらわすことがある」という事実を指摘し、これを「臨時的発話」であるとされた。

また、国立国語研究所（1960:281 吉沢典男氏執筆）に、「質問的表現」でありながら「平調」をとる発話の例として「スポーツニ カンケイ アル？」、「タベラレル？」の2例があげられ、「臨時的なもの」とみなされている。

- 7) 大石初太郎氏は、文末に「か」を持つ疑問文でも、それ以外の疑問文（これは多様なものを含むようであるが詳細は不明である）でも上昇調の用いられる比率はほとんど変わらず約75%であるという興味深い調査結果を示された（1969:190）。なお「の」を疑問の助詞と見るのは不適切のように思われる。

補注1 本稿は文部科学省科学研究費補助金による研究成果の一部である。

補注2 服部（2001）の訂正

1頁16行目

（誤）小学館『ザ・ベリーベスト・オブ志ん生』

（正）日本音楽教育センター『ザ・ベリーベスト・オブ志ん生』

参考文献

- 大石初太郎 (1969) 「日本語の音声表現について」『日本語の発見 ことばの勉強 - 1』 山本安英の会編
- 川上 葵 (2000) 「服部氏のネの説に同調」『国語学』 203号 33-34
- 木部 暢子・久見木大介 (1993) 「鹿児島方言の質問のイントネーションについて」鹿児島大学法文学部紀要『人文科学論集』 38 19-34
- 木部 暢子 (1996) 「チャレンジコーナー ジュニア版」『月刊 言語』 7月号
- 国立国語研究所 (1960) 『話しことばの文型 (1) - 対話資料による研究 -』 秀英出版
- 服部 匡 (1999) 「終助詞ネの音調に関する森山説への疑問」『国語学』 199 90-92
- 服部 匡 (2001) 「終助詞ネに関する二三の観察—落語を音声資料として—」『同志社女子大学日本語日本文学』 15 1-10
- 早田 輝洋 (1999) 「東京方言の文末のアクセントとイントネーション」『音調のタイポロジー』 大修館
- 橋本 修 (2000) 「終助詞「ね」の、自然下降型イントネーション」筑波大学『東西言語文化の類型論』 特別プロジェクト研究報告 117-127
- 宮地 裕 (1965) 「文末助辞と質問の昇調」国立国語研究所論集『ことばの研究 (一)』(『新版 文論』 明治書院 1979 に改訂再録、そこから引用する)